



フェスティバルオーケストラA

シベリウス / 「エン・サガ」 (ある伝説)

シベリウスの生きたフィンランドは12世紀からスウェーデン領下、19世紀にはロシアの压制下にありました。それゆえ民族的題材にインスピレーションを得て作曲をしたシベリウスは国家的英雄とされています。彼のサウンドは北欧の景色と気温、クライマックスではそれとは対照的な熱く強い意志を感じさせます。

シベリウスの音楽観を表すエピソードを一つご紹介します。1907年ヘルシンキフィルハーモニーを指揮するために来たマーラー (47歳で《千人の交響曲》を完成した年) は42歳のシベリウスを訪ねました。

マーラー「あなたの曲を指揮するにあたり、なにかお望みは？」

シベリウス「別に…」

シベリウスは表面的効果でなく、自身の内的な法則に従うことを尊んだといえます。

「シベリウスの作品は全てに異なった特徴があるが、それは彼が常に新しいスタイルを求めていたというのではなく、純粋に内的欲求に従ったものである」とある研究者は語っています。

本日演奏する「エン・サガ」はシベリウス最初の交響詩です。

交響詩とは表題付き音楽のことで、「ピアノの魔術師」と呼ばれた作曲家リストが造り出したものです。それ以前にも表題付き音楽はありました。ヴィヴァルディの『四季』、ベートーヴェンの『田園』、ベルリオーズの『幻想交響曲』。ヴィヴァルディは楽譜に十四行詩を併記しました。ベートーヴェンは「描写よりも感情の表現」と言ったそうです。ベルリオーズは自分の幻想を自由奔放に音楽化しました。しかし、それらはみな古典的な形式によるもので、その表現力には制約がありました。それに対してリストは、形式を自由化することにより表題を詩的に扱い、それを交響詩と名付けたのです。

「エン・サガ」とは、シベリウスの母語であったスウェーデン語で「ある伝説」の意味です。このタイトルについてシベリウスは多くを語らず、北欧神話のことな

のか一般的な伝説のことなのかは明らかではありません。

所々に“伝説の語り部”を思わせるフレーズが特徴的なこの曲は、ゆったりー速いーゆったりの大きな3部形式です。神秘的な弦楽器の分散和音が印象的なイントロ、心地よいテンポの中、時折物語るソロヴィオラが顔を出す中間部、曲の締めくくりには心のこもったクラリネットのビッグソロとそれを受け継いだソロチェロの語りで静かに伝説を閉じます。

シベリウスは本日演奏する他の2人の作曲家とのつながりがわかっています。シベリウスが26歳の1891年、ウィーン留学の時、ブルックナー (当時67歳) の交響曲第3番 (再演) を聴き、その厳格なカトリック性に感動し「現存する作曲家すべての中で最高！」と婚約者に手紙を書いたと記録にあります。1889年ベルリン留学中にはR.シュトラウスの『ドン・ファン』の初演を聴いています。この年は本日演奏する「死と変容」が完成された年でもあります。

フェスティバルオーケストラB

R. シュトラウス / 「死と変容」 (死と浄化)

シベリウスの1歳年下でドイツ生まれのリヒャルト・シュトラウスも交響詩で名を挙げた作曲家です。シュトラウスはそれをさらに発展させ、色彩的なサウンドを造り出しました。また扱う内容も、『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』のように物語性のあるものから『ツァラトストラはこう語った』のように難解な哲学書、そして本日演奏する「死と変容」のように死とその後の観念的世界を扱ったものまで多彩です。

指揮者としても第一線で活躍したシュトラウスの逸話は数多く、早くトランプをやりたいからと、速いテンポで指揮して曲を終わらせた話や、実はギャラの計算が好きで、息子から「パパ、今日はいくら儲かったの？」と聞かれ、「お前はワシの本当の息子になったな」と喜んだ話が残されています。

「死と変容」はその曲名からは意外な、25歳の時の交響詩3作目です。

曲は、イントロとコーダを持つ自由なソナタ形式で

す。主人公が病との戦いに苦悩し、あるときは幸せだった日々を思い返し、またあるときは強く生きようします。曲の最後では死を象徴する打楽器の銅鑼が鳴り、ついには息絶え来世で「変容（浄化）」をとげる様子が描かれています。

フェスティバルオーケストラ C ブルックナー / 交響曲第6番

ブルックナーはベートーヴェンの第9交響曲が初演された年に生まれ、ブラームス（犬猿の仲）とほぼ同時代に生きたウィーンの作曲家です。生涯敬虔なカトリックで、オーストリアの緑豊かな自然の中、教会のオルガンと聖歌隊の響きが彼の音楽家としてのスタートでした。ウィーン国立音楽院の教授に就任後は交響曲の作曲に専念します。

ブルックナーは生涯独身でしたが、教会の前を通りかかる女性に「お嬢さん、こっちへいらっしゃい。私がいま作曲中の交響曲についてお話ししましょう」などと声をかけていたという逸話が残っています。

ブルックナーの交響曲は、第1回バイロイト音楽祭で《ニーベルングの指輪》の初演聞いて以降、外野の声にも影響され、作品の改定が繰り返されていますが、どれも一本太い軸の通った彼の人生が見られます。それはシベリウスも感動した敬虔で厳格なカトリック性であり、その独自の表現技法です。弦楽器をベースに金管楽器が作り上げるゴシック建築の大聖堂のような壮大なハーモニーとスタイルです。

後の研究者は、曲が弦楽器のトレモロで始まる「ブルックナー開始」、オーケストラを一斉に止めることで新たな曲想を始める「ブルックナー休止」などのネーミングをつけていますが、本日お届けする交響曲第6番には「ブルックナー休止」がありません。

第1楽章 Maestoso

第2楽章 Adagio. きわめて荘重に

第3楽章 Scherzo. 速くなく-Trio. ゆっくり

第4楽章 Finale. 動きを持って、しかし速すぎないように

ブルックナー作品の原典版楽譜には2種類があり

ます。ハース版はナチスドイツの協力の下に出版された楽譜で、戦後ナチスの影響を払拭すべく作られたのがノヴァーク版です。楽譜に記載されたりハーサルマーク（練習記号）を見ると、ハース版にはユダヤを表すJが抜けていますが、ノヴァーク版ではIをJに変更して出版しています。ユダヤ系の指揮者は多くはノヴァーク版支持しているようです。

交響曲第6番は、珍しく改訂されていないので、両版間での違いは少なく、当演奏会では楽譜入手の関係でハース版を使用しています